

## 南極とヒマラヤ

深瀬和巳

2003 年は、日本隊がヒマラヤのマナスル (8163 m) に最初に挑んだ 1953 年から半世紀という節目の年であった。マナスルは 3 年後の 56 年に、第 3 次隊が初登頂に成功している。

52 年に、日本は長かった占領が終り独立国家になった。久しぶりの国際社会復帰で、海外への情熱はマナスルへの挑戦となり、さらに折からの IGY (国際地球観測年) の一環として、南極への関心が高まって行った。

村山雅美さんは、日本登山史上に金字塔を打ち立てたマナスル登山隊員である。そして日本隊がマナスル登頂に成功するや南極へと転じ、56 年 11 月、第 1 次隊を乗せ東京港を出港した「宗谷」に早くも姿を見せた。その「宗谷」出港から、歳月は流れ、2006 年には南極観測 50 年を迎える。



筆者  
アマ・ダブラム (6856 m) の前で

村山さんは 1 次に続き 2 次の副隊長、3 次の越冬隊長、5 次の越冬隊長、7 次の隊長、9 次の越冬隊長であり、9 次で日本隊念願の「南極点往復走破」の偉業を成し遂げた。ヒマラヤと南極という地球上の“二つの極”で、チームとして登頂と走破の二つの成功を収めた日本人はいないのでなかろうか。

03 年晩秋、85 歳になられた村山さんを囲んで、ヒマラヤの旅が計画された。風雪をくぐり抜けた南極男・山男たちの、すばらしい OB 旅行会であった。

### 憧れのエベレスト

7 次隊で一緒だった草刈信行さんが、今度のヒマラヤ旅行中に「深瀬さんは目で山に登る人だから」と言った。うまいことを言う人だと感心して、「私は口ばかりの人間でしてね」と応じた。

ヒマラヤの本はよく読んだ。登攀記を読んでは、登ったような気になった。

山だけでなく、極地、海洋など未知なるものに挑戦するものを片っ端から読んだ。また英女王戴冠式の前日に「英国隊がエベレストに初登頂した」とのニュースがロンドンに届いたという出来事には、“第 3 の極”と呼ばれたエベレストに、人類はつ

いに登ることができたということと、ニュースの速報による女王への偉大なプレゼントに興奮した。

ノイスの「エベレスト・その人間的記録」、ヒラリーの「わがエベレスト」、正式報告のハントの「エベレスト登頂」などが相次いで出版された。日本隊の記録映画「マナスルに立つ」も、記憶に残っている。次第に機会があれば一度はヒマラヤの山々を見たいものだと思うようになった。

それから 50 年もたって、今度のヒマラヤ旅行のお誘いである。忘れていたものが蘇った。村山さんにも久し振りにお会いしたい、そして憧れのエベレストを見たい、その後アンナプルナも見たい、と思い立った。

私の属した B 班は、ヘリコプターでルクラ経由シャンポチェ (3720 m) に飛び、そこから 1 時間程度歩

いてホテル エベレスト ビューに着き、1 泊してエベレストを心行くまで眺めるといふ豪華な計画だった。

ところがルクラからホテルにかけて霧が深いという。ほこりっぽいカトマンズ国内線待合室で天候回復を待ちながら 1 日目はダメ、2 日目もダメ。3 日目の夜はポカラに全員集合だから、これでホテルに泊まることはできなくなった。しかし諦め切れない。3 日目の午前に賭けることにした。

そして 3 日目、12 月 6 日朝 10 時、ついに飛び立った。一瞬でもよいから、エベレストを見たいと願った。「Because it is there」(そこに山があるから) との名句を残したマロリーや、初登頂のヒラリーやテンジン、1970 年に登頂に成功した日本山岳会の松方三郎隊長以下日本隊の人達など、多

くの国のたくさんの人達が取り付いたこの山は、どんな姿を見せてくれるのだろう。

ホテルのテラスの前面は、濃いガスが流れていて、山は全く見えない。しばらく待っていると、突然右前方間近にアマ・ダブラム (6856 m) が姿を現した。純白のウェディングド



**B 班:** (後列) 吉川暢一 三田安則 吉野正明 深瀬和巳  
宮地檀子  
(前列) 田中早智子 丸山ナミ 岡田和子 渡辺千恵子  
(ホテル エベレストビューのテラスにて)

レスを身にまとったように、全身を氷雪で固め、眼前にすくと垂直に屹立していた。

気象悪化の兆しがあるということで、1時間余で引き揚げることになった。ついにエベレストを拝むことはできなかったが、アマ・ダブラムを見たことで気分転換することにし、A班、C班が待つポカラに急いだ。

### 垂直と水平

翌7日未明、ポカラ近郊の山頂から、アンナプルナ連峰の夜明けを見た。右手からアンナプルナ、マチャプチャレ、南アンナプルナなどの稜線が、朝日を受けてピンク色に染まっていく。初登頂の榮譽に輝くフランス隊エルゾーグやラシュナルの世界が開け始めた。はるか左手に8168mのダウラギリも浮き上がってきた。

下界は深い底までまだ闇で、稜線



ヒマラヤの空を飛ぶ（カトマンズからシャンボチェへのヘリコプターから）

の屹立感がすごい。昨日のアマ・ダブラムといい、きょうのアンナプルナといい、ヒマラヤは縦、垂直の世界だ。それに比べ南極は横、水平、平面の世界だ。 - 松方三郎さんを思い出した。

私は3次隊の隊員として出発する前、松方さんに挨拶に行き、いろいろお話を伺った。当時松方さんは共同通信社の専務理事で、日本山岳協会会長、後に日本山岳協会会長を勤められた。

松方さんは、南極とヒマラヤは違う世界だが、共通していることもあるね、という話をされた。ヒマラヤは高さ、縦の厳しさがあり、南極は無限、広がり、横、水平の厳しさがある。そして雄大さ、美しさや、寒さ、強風など自然の厳しさ、過酷さは共通している。どちらも未知への強烈な関心を掻き立ててくれる。そして周到な準備、固い団結、危険に

対する訓練、勇気をもって進退を決める思慮と判断が必要であり、何よりも自然に対する謙虚さが必要だよ、といったような話だった。

今度ヒマラヤの独特の世界を見ているうちに、半世紀近い昔の先輩の話を思い

出し、さすがに卓越した見解であり、行き届いたご配慮を頂いたものと、改めて感謝した。

### 南極点への道

村山さんは、南極参加の当初から南極点へ行こうと考えていたと、私は思う。3次越冬で南極の実相を知り、5次越冬中雪上車を南緯75度まで進め、極点まで1500kmの所に旗を立てている。この先、極点までを



1968年、第9次隊極点旅行隊の南極点到達（「南極観測二十五年史」発行文部省、1982年）



極点旅行隊員（第9次隊）（「南極点への道」村山雅美著・発行朝日新聞社、1969年）

繋ぐ日を心に誓っていたに違いない。

基地を閉鎖して帰国した後の、再開への努力ぶりは、その一部を私は知っており、村山さんの情熱が、閉鎖期間を短縮したと思っている。そして極点旅行計画案は南極再開とともにできていたし、9次隊の出発時には、「内陸旅行要覧」も完成していたという。

名著「南極点への道」で「南極旅行は、観測調査を基盤に、長期間に亘りかつ変化に乏しい環境で行動することは戦闘機による局地戦闘の連続であるヒマラヤに対し、長距離渡洋爆撃戦にも似て、その作戦は計画的に進め得ることを私は期待して日本隊の極点旅行を考えていた。……極点旅行はすべてこの（「内陸旅行要覧」の）計画に基づき実施することに絞って準備し、実施した故に、悲願ともいふべき極点到達の瞬間にも、山頂を極めた時の感傷は見出せなかった」と書いている。状況の違うヒマラヤと南極を包み込み、一段高い所に止揚させた村山さんの心境が伺えて、感慨深い。

南極大陸地図を開くと、アメリカ、ソ連（現ロシア）の縦横に走りまくった線の中に、“村山シュプール”ともいえる日本隊の赤い線が一直線に極点へ伸びている。この線があるからこそ、今日の落ち着いた科学観測体制があるのだと、思っている。（3次夏・報道、7次夏・同行）